

『過程の演習 新国語問題集』解説

18 山極壽一「負けない構えの美しさをゴリラから学ぶ」

18 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(名古屋大)

アフリカの赤道直下、ヴィルンガ火山群の山地林でマウンテンゴリラの観察を始めて間もないころのことだ。私がゴリラから数メートルの距離を置いて観察していると、近くを通りかかったシリ―という若いオスのゴリラがちらつと私の方を見て近寄ってきた。これはまずい、と私は思った。

それまで野生ニホンザルの調査をしてきた私は、サルに近づかれたらサルのルールに従って行動せよ、という鉄則を守ってきた。ニホンザルの社会では、相手を見つめるのは強いサルの特権である。弱いサルは強いサルに見つめられたら、決して見返してはいけない。**目を合わすと挑戦したと受け取られ、強いサルから攻撃されることになるからだ。**目をそらすか、歯をむき出して笑ったような表情を浮かべ、自分が逆らうつもりがないことを表明しなければならぬ。そこに相手と競合するような食物があればなおさらのこと、決して食物に手をのばしてはいけない。だいたいのサルが近づいてくるというのは、私の周りにサルの関心を引くものがあるからだし、そのサルは自分の方が私より強いと感じているはずなので、刺激しないようにそつと目を伏せておく方が無難である。

「A」「ゴリラのシリ―が近づいてきたときも、①私はシリ―の方を見ないように目を伏せた。ところが、シリ―は一メートル前で止まって、じつと私の顔をのぞきこんだのである。若いオスとはいえ、一〇〇キログラムを優に超える巨漢である。グロ―プのような手をしているし、長くてaスルドい大歯が光る。つかまれて咬まれてもしたら重傷を負いかねない。私は逆らうつもりがないことを示すため、さらに横を向いた。」B「シリ―は私が向けた方へと顔を寄せ、さらに私の顔を正面からじつと見つめたのである。顔と顔の距離はわずか二〇センチほどしかない。私は恐怖にb馴られて目を伏せてじつとしていた。意外なことに、シリ―はしばらく私の顔をのぞきこむと、低い声でうなり、二、三步遠ざかると、ぼこぼこぼこぼこ両手で力強く胸を打っては足早に遠ざかって行ったのである。

しばしc果然とシリ―を見送った私は、ひよつとしたらシリ―の行動を私が誤解したのではないかと思った。ニホンザルと同じことだと思っていたが、ゴリラが顔をのぞきこむのは違う意味があるのかもしれない。そこで、私はゴリラどうしの行動をもつと注意深く観察してみることにした。すると、これまでただ近くによるだけで何もしていないと思っていた行動が、実は重要な機能を果たしていることに気づいた。ゴリラどうしが近づきあつて顔を合わせる。

「C」ニホンザルやチンパンジーのように体に触れることもないし、抱き合ったり、相手に馬乗りになったりすることもないので、私は何か意味のある交渉をしたとは見なしてこなかった。ところが、それは、ゴリラのあいさつ、遊びの誘い、求愛、仲直り、けんかの仲裁などに用いられていたのである。顔を合わせても、どちらかがニホンザルのような歯をむき出す笑いを浮かべることはない。どちらも無表情のまま、一分近くも至近距離でじつと顔を合わせるのだ。何とも不思議で静かな社会交渉に見えた。

そのうち、私はこれがゴリラの社会性を表す典型的な構えであることに気づいた。ニホンザルは常に自分と相手のどちらが強いかを認識し、確かめながら暮らしている。群れで仲間といっしょに移動すれば、食物や休み場所、交尾の相手をめぐつて仲間と競合が生じる。それを防ぐために、あらかじめ優劣関係を作り、弱い立場のサルが自分の行動を抑制するように調節しているのだ。ところが、ゴリラはサルのような優劣関係を認識していない。ゴリラのオスはメスの二倍近い体重を持つ。子どものゴリラの一〇倍以上もある。でも、どんなに体の差があっても、小さいゴリラは劣位な態度を取らない。体の大きなゴリラが近づいてきて顔をのぞきこんでも、視線をそらすことなく、相手の顔をじつと見返す。自分が食べようとしていた食物を横取りされたら、ゴツゴツと不満の声を出す。決して負けていないのである。

ゴリラには、ドラミングという両手の平で交互に胸をたたく動作が見られる。成熟したオスの大胸筋の下には大きな袋が発達していて、息を吸い込むと胸が太鼓のようにdフクらみ、たたくとい音がする。ニキロ四方にまで響き渡るゴリラ特有の遠距離コミュニケーションだ。これは長い間、ゴリラの宣戦布告と見なされ、ゴリラの凶暴性を示す態度と考えられてきた。野生のゴリラの行動が群れの中で観察されるようになって、やつとドラミングが戦いの合図ではないことが分かるようになったのである。ドラミングはオスの専売特許ではない。音は小さいが、メスも子供

も胸をたたく。それは、遊びの合図だったり、好奇心やeコウフンだったり、不満の表明だったり、自己主張だったりする。特定の相手に向けられないことも多い。雨宿りをしてみんなが木の陰で休んだ後、さあ再びfサイショクの旅に出かけようというときなど、リーダーのオスが体をぶるぶるつとg震わせて雨粒を落とし、ぼこぼこぼこぼこ胸を力強くたたいて歩み始める。とても格好良く見える。

私が驚いたのは、背中の白い大きなオスどうしが近づきあつてけんかが始まりそうになったとき、また若いシリ―がするつとオスたちの間に割り込んでけんかを止めたことだ。このときも、シリ―は二頭のオスにわかるがわる近づいてその顔をのぞきこみ、互いを遠ざけることに成功した。ニホンザルでは決してこのような仲裁は起こりえない。体の小さなサルが大きなサル同士のけんかに介入したら、すぐさま攻撃されて仲裁どころではなくなってしまうからだ。ゴリラでそれが可能なのは、体の大きさに応じて優劣が決まっていないことと、勝敗をつけることがトラブルの解決とされていないからである。ぶつかり合おうとしたオスたちはどちらも負けようとは思っていない。だから実際に組み合えば、どちらもけがなしには終わらない。誰かが割って入ってくれば、けんかをせずにどちらともメッツを失わずに引き分けることができる。そこで、自分たちよりも体の小さい仲裁者に従うのである。

つまり、群れ生活に平和と秩序をもたらすルールがニホンザルとゴリラとは違うのだ。ニホンザルは互いに優劣を認知し、勝ち負けをすぐに決めてトラブルを防ぐ。ゴリラは勝ち負けを決めずに、第三者が仲裁に入ることによって対等性を維持する。メッツを保つためには、仲裁者は小さいほうがいい。もし大きなゴリラが仲裁に入ったら、力づくで止められたということになり、メッツが保てなくなるからだ。相手のをのぞきこむ行動も②ドラミングも、こういったゴリラの対等性を維持するために発達したに違いない。

こうしたニホンザルとゴリラの社会性を人間と比べてみると、③人間はサルではなく、ゴリラに近い社会性を持っているように見える。子どもたちから人間は負けず嫌いだし、トラブルを勝ち負けで解決するのではなく、第三者が仲裁して互いのメッツを保とうとする傾向が強いからだ。しかし、人間はゴリラほどhテツテイ的に対等性にこだわるわけではない。相手に勝ちたい、仲間より優位に立ちたいという気持ちも持っている。ただ、そこには慎重な気配りが働いている。勝つことによって、実は自分が不利な状況に置かれることが多いからである。

ニホンザルのように、勝つことは相手をi屈服させ、抑制させ、押しのけることを結果する。勝者と敗者は対等ではなく、勝者が利益を独り占めにする。だから、勝つても勝者は敗者と友達にはならない。でも、負けないでいようとすることは相手と対等な立場が目標なので、相手を屈服させたり押しつけたりすることにはならない。友達を失わないし、かえって仲良くなれるかもしれないが、常にトラブルが起る危険が生じる。そのため、間を取り持つてくれる別の仲間が必要なのである。人間はこういったことにいつも最大限の注意を払いながら暮らしている。勝ちたいけれど友達は失いたくないから、勝利を誇らず、しきりに敗者に気配りをする。サルのように利益を独占せず、みんなに気前よく分配する。ゴリラのように、自分より弱い仲裁者であっても言うことを聞いてメッツを保つ。人間は互いに対等であることに常に気を配りながら社会を作ってきたように思える。

しかし、現代の社会は効率性を重視するあまり、勝敗をつけることでトラブルを解決する傾向を強めているように見える。それは、「負けないとする態度」を「勝とうとする気持ち」に読み替えることによって加速している。サルとゴリラのように、この二つははっきり違う社会性を作り出す。それを混同して同じものと見なすことによって、日本は競争社会を乗り切ろうとしている。鈍感な親たちは、負けたくないと思う子どもたちを見て、「勝ちたい」と思っている」と誤解し、尻を叩いて勝たそうとする。その結果、不本意ながら勝利を手にした子どもたちは友達を失い、しだいに孤独になっていく。ねたまれ、うらまれ、「疎んじられていじめにあい、孤立していく」。

そんな事態を深刻化させる前に防ぐには、もう一度人間の社会の由来を考え直してほしい。人間はニホンザルではなく、ゴリラと共通の祖先から対等性をより重んじる社会を受け継いできた。それは、互いに静かに向き合う交渉を持つことによって保たれてきた。人間らしい社会を作る上で、顔と顔を合わせ、互いの暖かい関係を確かめ合うことはとても重要なコミュニケーションなのである。IT技術は私たちに、遠く離れていても会話や情報交換ができる機会を与えてくれた。しかし、それは人間の対等な社会性を保持してくれる力を持っていない。人間が争わず、勝敗にこだわらず、対等で平等な関係を保つためには、互いに顔を合わせる機会を多く持ち、トラブルに仲間が機敏に反応して仲裁するような暮らしを設計することが不可欠なのである。それは④勝つ構えより、負けない構えの美しさを尊ぶ社会といってもいいだろうと思う。

問3 傍線部①について、筆者はなぜこのような行動をとったのか。五〇字以内（句読点・かつこ類も字数に含める）で説明せよ。

「目を合わすと挑戦したと受け取られ、強いサルから攻撃されることになるからだ。」

目を合わすと挑戦したと受け取られ、相手から攻撃されると考えたから。（33字）

▼五〇字に足りない。「サルでの経験をゴリラに適用」という点を足す。

サルの調査での鉄則に従って、目を伏せることによって、相手から攻撃されないようにしようと考えたから。（49字）

▼「敵意のないことを示す」という内容も入れるとしたら？

サルの調査の経験から、目を伏せることで敵意のないことを示し、攻撃されないようにしようと考えたから。（49字）

問5 傍線部③について、以下の問に答えよ。

(1) 筆者は人間の社会とゴリラの社会にどのような共通点があると考えているか。五〇字以内（句読点・かつこ類も字数に含める）で説明せよ。

(2) また一方で筆者は人間の社会とゴリラの社会にどのような相違点があると考えているか。七〇字以内（句読点・かつこ類も字数に含める）で説明せよ。

「こうしたニホンザルとゴリラの社会性を人間と比べてみると、③人間はサルではなく、ゴリラに近い社会性を持っているように見える。子どものころから人間は負けず嫌いだし、トラブルを勝ち負けで解決するのではなく、第三者が仲裁して互いのメンツを保とうとする傾向が強いからだ。／しかし、人間はゴリラほど徹底的に対等性にこだわるわけではない。相手に勝ちたい、仲間より優位に立ちたいという気持ちも持っている。ただ、そこには慎重な気配りが働いている。勝つことによって、実は自分が不利な状況に置かれることが多いからである。」

(1)トラブルを勝ち負けで解決するのではなく、第三者が仲裁して互いのメンツを保とうとする傾向が強い点。（48字）

▼「ゴリラのように、自分より弱い仲裁者であっても言うことを聞いてメンツを保つ。人間は互いに対等であることに常に気を配りながら社会を作ってきた」を参照して、「自分より弱い仲裁者」やキーワードである「対等性」を入れたい。

トラブルを勝ち負けで解決せず、自分より弱い者であってもその仲裁に従い、対等性を保とうとする点。（47字）

(2)人間はゴリラほど徹底的に対等性にこだわるわけではなく、相手に勝ちたい、仲間より優位に立ちたいという気持ちも持っている点。（60字）

▼不足。「ただ、そこには慎重な気配りが働いている。」という注釈を足す。「気配り」とは？
↓「勝ちたいけれど友達は失いたくないから、勝利を誇らず、しきりに敗者に気配りをする。」

人間はゴリラほど徹底的に対等性にこだわるわけではなく、相手に勝ちたい、仲間より優位に立ちたいという気持ちも持っているが、友達は失いたくないから、勝利を誇らず、しきりに敗者に気配りをする点。（94字）

ゴリラの社会は徹底的に対等性にこだわるが、人間の社会は勝ちたいという気持ちも持ちつつ、同時に敗者への気配りによって対等性を保とうとする点。（69字）

※勝敗なしの対等性 ↑↓ 勝敗あり・敗者の配慮ありの対等性

◎問6 傍線部④について、筆者はどのような社会と考えているか。本文に即して一一〇字以内（句読点・かつこ類も字数に含める）で説明せよ。

「勝つ構えより、／負けない構えの美しさを尊ぶ社会」☆切り身

勝つ構えだけの現在の社会ではなく、負けない構えの美しさを尊ぶ社会。

← ☆AではなくB

●「勝つ構え」（サル型）⇨「効率性を重視するため、勝敗をつけることで問題を解決する傾向」（勝敗をつけない交渉というのは効率性に欠けることを含意する）

「勝利を手にした者は友達を失い、孤独になっていく」（敗者への配慮がないから）

●「負けない構え」（ゴリラ型・これまでのあり方）⇨「互いに顔を合わせる機会を多く持ち、トラブルに仲間が機敏に反応して仲裁するような暮らしを設計しようとする社会。」（一六三字）

「負けたくないという思いを、勝ちたいという思いと混同しない」

効率性を重視するため、勝敗をつけることで問題を解決する傾向にあり、勝利を手にした者は友達を失い、孤独になっていく現在の社会とは異なり、負けたくないという思いを、勝ちたいという思いと混同せず、顔と顔を合わせ、互いの暖かい関係を確かめ合う機会を多く持ち、トラブルに仲間が機敏に反応して仲裁するような暮らしを設計しようとする社会。」（一六三字）

効率性を重視し、勝敗による問題解決にこだわり、勝利者も孤独に陥る現代社会とは違い、負けまいという思いを勝つことと混同せず、互いの関係を直に確かめ合う機会を多く持ち、問題には仲間が仲裁しつつ、対等な関係を保とうとする社会。」（一一〇字）

※「現在社会」の説明が長くなりすぎないように。

【問題集の解答例】

問1 a⇨鋭 b⇨力 c⇨ボウゼン d⇨膨 e⇨興奮 f⇨採食 g⇨フル h⇨徹底

i⇨クツブク j⇨ウト

問2 A⇨イ B⇨カ C⇨エ

問3 サルと同様の習性に即して、目をそらすことで逆らう意思がないことを表明し、攻撃されるのを防ぐため。（48字）

問4 ア・ウ・エ

問5 (1)⇨トラブルを勝ち負けで解決するよりも、自分よりも弱い者の仲裁を受け容れ、対等性を維持しようとする点。（49字）

(2)⇨勝敗を決めずに対等性にこだわるゴリラ社会と異なり、人間の社会は勝つことを望みながらも常に敗者への気配りを怠らず、対等性を保とうとする点。（68字）

問6 効率性を重視し勝敗にこだわることで人々が孤独を抱える現代社会と違い、負けまいという意識を基本に置きながらも、相互の暖かい関係を直接確かめ合う機会を多く持ち、時に仲裁を受けながら対等で平等な関係を保とうとする社会。（106字）

